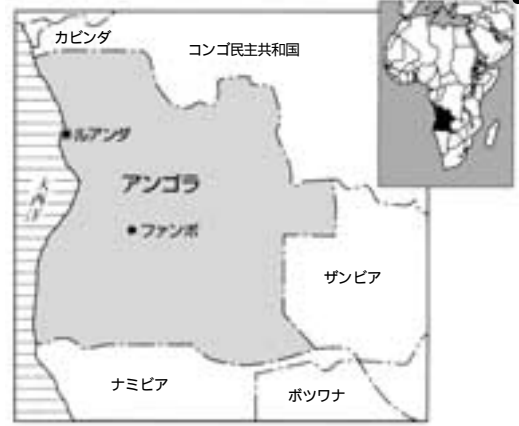


# 「ユニセフ子ども物語」

地球に生きる子どものくらし

Republic of Angola

## アンゴラ共和国



## 平和の中へかえるとき 少年兵ゲルバシオ

「敵だ!」ぎゅっと銃身をにぎり、敵の顔を見たと思った瞬間、ゲルバシオは目がさめました。にぎりしめた手が汗でぬれています。外では、草がさわさわと風に吹かれ、のぼりはじめた朝日に葉の露をかわかしています。

戦争は終わったんだ……このことを思い出すのにしばらくかかりました。

\*\*\*\*

アンゴラの少年ゲルバシオは、11歳の時から少年兵でした。戦争は生まれたときからずっとつづいていました。けれど、とうとう平和がやってきたのです。

戦争が終わり、ゲルバシオのいた部隊も解隊されることになりました。ゲルバシオは、自分たちが戦っていたファンボの町から50キロ離れたヴィラ・ノヴァにあるキャンプに来ることになったのです。

ゲルバシオは軍隊に入れられてすぐに、AK-47という銃をもたされ、戦いの最前線につれていかれました。銃の扱いは簡単ですぐに覚えました。水くみやせんたく、食事の用意もゲルバシオたち子どもの仕事でした。

へまをしたり、気に入らないことがあると、おとなたちはゲルバシオをなぐりました。さからうなんてできません。ゲルバシオの兄弟は戦争中に殺されました。とうさんは兵隊にとられ、かあさんともはぐれ、二人ともどこにいるのか、生きていのかさえわかりません。軍隊をほっぽりだされたら、家族のいないゲルバシオは、たちまち食べることもできなくなるのです。

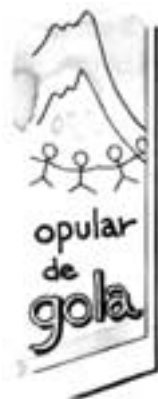
戦いでたくさんの少年たちが撃たれたり、地雷を踏んだりして死にました。戦場で出会った敵がゲルバシオと同じくらいの少年だったこともあります。殺されるか、殺すか…それが、毎日の生活でした。

そのうち、仲間たちが死んでも、ゲルバシオは泣かなくなりました。涙も悲しい気持ちもなくなってしまったかのようでした。そして、笑うこともなくなりました。ただ、おとなたちになぐられるかもしれない、あしたは死んでしまうかもしれない、といつもおびえていたのです。

ヴィラ・ノヴァのキャンプは、ユニセフなどの支援で井戸も整い、必要なものはそろっていて、生活を心配することはありませんでした。でも、このキャンプに来てからも、ゲルバシオは泣いたり笑ったりすることのない少年のままでした。戦争しか知らないゲルバシオには、「平和」とはどんなものなのか、「自由」とは何をすることなのかよくわかりませんでした。

まもなくキャンプでは、ゲルバシオたちが平和な生活に戻るためのプログラムがはじまりました。学校で読み書きを勉強したり、働くための技術訓練を受けたりするのです。ゲルバシオは学校なんて行ったこともなかったので、読み書きはもうお手上げでした。けれどもある日、キャンプにはあったポスターの文字を一字一字追いついて、ついにそれが読めたとき、胸がほっとあたたかくなったような気がして不思議でした。

ゲルバシオが一番苦手に思ったのは、少年たちが集まって自分たちの経験や将来の夢を話すプログラムでした。じまんげに自分の体験を話す少年や、ぼつりぼつりとこわかった思い出を話して涙ぐむ少年もいましたが、ゲルバシオはついぞ一言も自分のことを話すことができずにいました。けれどもこのプログラムに参加するようになってから、いつも一人だったゲルバシオは、ジョアンという少年といっしょにい



ることが多くなりました。「おとなになったら、トラックの運転手になるんだ。カッコいいユニフォームを着ているんなところに行きたい」と、すこしつむきながら話すジョアンは、ゲルバシオになつかしい何かを思い出させるような気がしたのです。

\*\*\*\*\*

その夢を見た日も、少年たちは集まって自分の経験をぼつぼつと話していました。それを聞きながら、ゲルバシオはふと、あの夢で見た敵の顔は弟のアントニオだったような気がしました。すこしはにかんだような顔、いつもゲルバシオのそばにいた弟、いつの日だったか殺されてしまった弟...あの夢の中の少年は敵じゃない、アントニオだ、そう思ったとたん、ゲルバシオの目に

涙があふれました。あわてて手で涙をぬぐいましたが、涙はあとからあとからあふれてきます。胸の中からあつくみあげてきたのは、いつかなくしてしまった悲しい気持ちでした。キャンプに来てはじめて涙を

見せたゲルバシオに少年たちは驚きましたが、みな静かにゲルバシオを見つめています。いつかそばに座ったジョアンが、ゲルバシオの背中をさすりつづけていました。(文：日本ユニセフ協会)



# 戦争の傷跡

## アンゴラの内戦

アンゴラは1961年から続いた独立運動の末、1975年にポルトガルから独立しました。しかし、独立直後からアンゴラは冷戦の渦にまきこまれていきます。当時のキューバとソ連が支援する共産主義政権「アンゴラ解放人民運動」(MPLA)と、黒人政権の成功を恐れた南アフリカ共和国と共産主義政権を快く思わないアメリカ合衆国が支援した「アンゴラ全面独立民族同盟」(UNITA)とが対立し、泥沼の内戦へと突入しました。豊かな地下資源に恵まれたアンゴラは、石油がその輸出のほとんどを占めていますが、その石油から得られる収益が内戦の資金源となり、両勢力はこうした地下資源をめぐるでも対立してきたのです。

冷戦が終結し、南アフリカ共和国のアパルトヘイト政策が撤廃されるなど国際情勢が動く中で、1991年、国連の仲介により和平への道筋が示されました。しかし1992年MPLAが選挙で勝利すると、UNITAは再び内戦を再開。1994年11月にようやく、和平協定がザンビアのルサカで調印され、UNITAのサビンディ議長の副大統領就任、UNITAの武装解除と新政府軍への編入などで合意し、内戦は一応の決着をみることになりました。その後、武装解除が進んでいますが、両勢力の完全な和解ははまだ達成されていません。

20年以上も続いた内戦は50万人もの子どもの命を奪い、75%以上の給水施設が破壊されるなど壊滅的な傷跡を残しました。



©UNICEF/HQ96-0089/Giacomo Pirozzi

## アンゴラの少年兵

MPLAもUNITAも15歳未満の子どもを兵隊として使っていたことがわかっています。政府は1500人程度という数を公表していますが、国連人道問題局は、現在ある15の軍隊解隊キャンプのうち4つのキャンプにいる元少年兵だけ

でも1500人を超えていると報告しています。

疑問を持たずに命令に従う、賃金を要求しないなどの理由から、子どもは効果的な戦力として使われてきました。少年たちが軍隊に入る理由には、軍隊が食べ物や保護を与え親代わりになること、家族を守るためなどが挙げられますが、中には孤児院から徴用されたり、誘拐されて兵隊にさせられた子ども数多くいます。

少年の多くは生まれたときから平常な社会生活を体験したことがなく、そのため、平和を得た現在でも多くの子どもたちが社会に適応できずにいます。

©UNICEF/HQ97-0721/Robert Grossman

## 残る地雷

戦争の大きな傷跡のひとつが地雷です。アンゴラには約1500万個もの地雷がうめられていると推測されていますが、これまで政府が

撤去できた地雷は8万個で、今もゲリラなどの手によって新たに地雷がうめられています。地雷のために5歳未満の子ども8千人を含む7万人が手足を失いました。被害を受けた子どもの

うち義足のある子どもの割合は10~20%、義足は成長に合わせて半年ごとにつくりなおさなければなりません。それには30~1000米ドルもの費用がかかります。ユニセフは地雷注意喚起教育のためのキャンペーンを行ったり、被害を受けた子どもたちのリハビリ支援などを行っています。

©UNICEF/HQ96-0093/Giacomo Pirozzi  
地雷のある所を示すマークや地雷の形態など、地雷の被害にあわないための教育を受ける子どもたち

